

# 第 I 部 論考編

## 女真語と女真文字

吉池孝一

〈要旨〉金代の支配者女真人の言葉である女真語と、その言葉を書き記した女真文字は、明代においても使用された。女真との通訳官の養成および外交文書作成のためである。女真文字は金代に作成されたものであるから、先ずは金代女真語を明らかにし、次いで明代女真語への変化を明らかにし、さらに同系の満洲語と比較することができるならば理想である。しかしながら、金代には未解読文字の解読に有用な対音・対訳資料（2言語対応資料）が乏しい。その点明代には豊富にある。そこで先ず明代の女真文字・女真語から着手し、次いでその情報をもって金代の女真文字・女真語に取り組むことになる。

### 1. 東アジアの言語状況

女真はツングース系の言葉をお話した。そこで、東アジアのどのあたりに関係する諸語が分布しているか簡略な言語地図で確認する<sup>1</sup>。

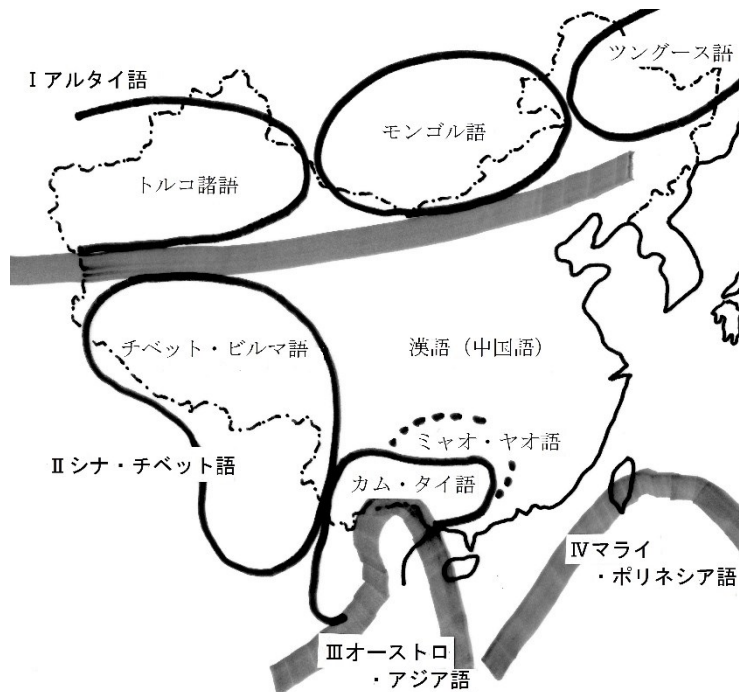


図 1. 東アジアの言語分布

<sup>1</sup> 李方桂著、小川環樹訳「中国における諸民族の言語と方言」『中国語学研究』創文社、1977年。中国社会科学院和澳大利亞人文科学院合編『中国語言地図集』香港：朗文、1987年。以上の二著を参照し作図した。

遼、金、元、明、清と続く王朝のうち、遼の支配者の言語は契丹語で上段中央のモンゴル語の系統。遼・金と並存して西北にあった西夏王国（次頁、図2参照）の西夏語は中央左のチベット・ビルマ語の系統。金の女真語は右上のツングース語の系統ということになる。清の満洲語も同じくツングース語の系統であり女真語の解明に欠かせない。

## 2. 遼・北宋時の女真

図2は1111年の状況<sup>2</sup>。図1の言語分布図と重ね合わせていただきたい。

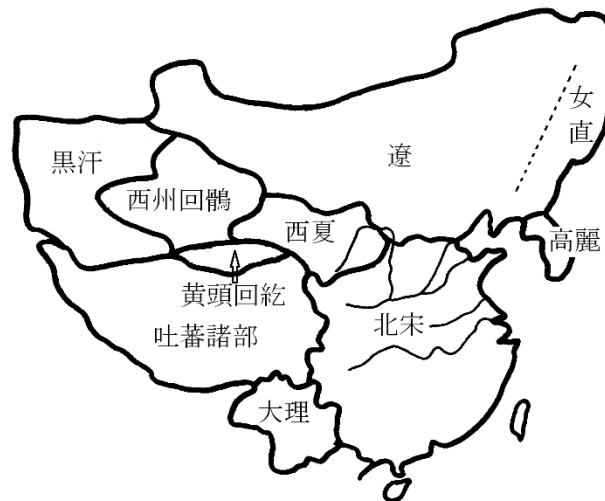


図2. 遼・北宋時期全図

(遼の北辺の勢力範囲は不明。便宜的に中華人民共和国の国境線を用いた)

遼の支配下にあった女真（女直）は金を建て、遼を滅ぼして華北に侵入し、宋の支配者とその一団を南方に追った。華北の支配者は女真族で非支配者は漢族である。ツングース系の女真語と漢語（中国語）が対峙することになった。清においても支配者の言語はツングース系の満洲語で非支配者の言語は漢語であった。両者ともに次第に漢化が進んだという状況は類似している<sup>3</sup>。金の言語の状況を知るうえで清の言語をめぐる状況の理解は有益である。

## 3. ツングース系言語の特徴

図1でアルタイ語とした3種の言語はよく似ている。発音の面では母音調和（1単語内に同類の母音を使う）がある。また、日本語のように単語に各種の語尾を付着させて文法関係を表わす。語順も日本語と同様で修飾語は被修飾語の前にくる。目的語も動詞の前にくる。

<sup>2</sup> 譚其驤主編『中国歴史地図集』上海：地図出版社、1982年を参照し作図した。

<sup>3</sup> 三上次男『金代政治・社会の研究』中央公論美術出版、1973年。鈴木靖「旗人の入関と漢族大衆芸能の受容」東京都立大学『人文学報』198号、1988年参照。

次にモンゴル語の例をあげる<sup>4</sup>。

■モンゴル語 <sup>ビー</sup>bi: <sup>エン</sup>en <sup>ノミーグ</sup>nom/i:g <sup>オンシラー</sup>onʃ/la:  
私 これ 本/を 読む/た  
私はこの本を読んだ。

母音には a,ɔ,o と e,ə,u のグループがある。一単語内で原則として互いに混じることがない。onʃla:の o と a に母音調和がみられる。そのため onʃle:とはならない。nomi:g の i:g や onʃla: の la:が文法関係を表わす語尾。修飾語＋被修飾語、目的語＋動詞の語順である点もこの例でわかる。

次に女真語と関係が深い満洲語文語の例を挙げる<sup>5</sup>。

■満洲語 <sup>バイビ</sup>baibi <sup>ジハベ</sup>jiha be <sup>エイテレブフィ</sup>eitere/bu/fi <sup>ガマブハ</sup>gama/bu/ha  
故なく 銭 を だます/受身/して 持って行く/受身/た  
故なく銭をだまされて持って行かれた。

母音には a,o,ū と e のグループがある。1 単語内で原則として互いに混じることがない。gamabu に付着した過去をあらわす語尾-ha に母音調和がみられる。そのため gama-bu-he とはならない。しかし jiha の後ろの語尾 (～を) は ba ではなく be であり母音調和はみられない。後に女真語を確認するが、女真語には母音調和にしたがって ba と be がある。gama(持って行く)+bu(受身)+ha(過去)をみると、語幹の gama に語尾などを付着させて文法関係を表わすことがよくわかる。語順は目的語＋動詞。この例には含まれないが修飾語＋被修飾語でもある。

#### 4. 女真語と満洲語の関係

女真語と満洲語は共にツングース語であるが両者の関係についていくつかの説がある。長田夏樹(1949)<sup>6</sup>は、女真語は満洲語においてすでに失われた古い特徴を有するが、満洲語とは別個の他のツングース系の言語ではなくその直接の祖語と考えられ、満洲語文語に対して中古満洲語と称することができるとする。ここで言う満洲語文語は口頭語に対する文章語のことで、満洲文字で書き表され規範化された満洲語である。女真語も女真文字で書き表す際にある程度は規範化されたはずであるから、規範化された女真文字・女真語は規範化された満洲文字・満洲語(満洲語文語)の直接の祖先だという説である。西田龍雄(1981)<sup>7</sup>は、女真語は満洲語の直接の祖先ではなく共通ツングース語からそれぞれ別れ出たとする。西田氏の考え方は長田氏と異なるが、これは時間を異にして存在する 2 つの同系統の言語 A と B の関係をどのようにみるかということである。この点について栗林均(1983)<sup>8</sup>よりモデ

<sup>4</sup> モンゴル国立大学モンゴル語研究室編、岡田和行編訳『モンゴル語教科書』東京外国語大学発行、1989年。

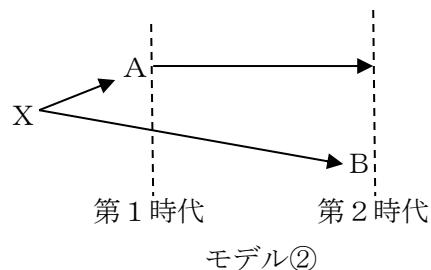
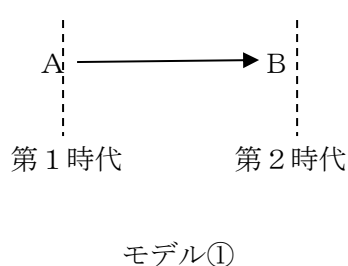
<sup>5</sup> 清・舞格著程明遠校『満漢字清文啓蒙』(1730年序)の第三巻「清文助語虚字」の例。

<sup>6</sup> 長田夏樹「満洲語と女真語」『神戸言語学会報』1、1949年。

<sup>7</sup> 西田龍雄「東アジアの文字」『世界の文字』大修館書店、1981年。

<sup>8</sup> 栗林均「比較言語学の課題と方法 —蒙古語歴史・比較研究批判—」『一橋論叢』89

ルを借りて確認する。



モデル①は同じ方言の連続であり長田氏の説に相当する。モデル②は互いに言語的継続をなさない二個の方言であり西田氏の説に相当する。女真語から満洲語への変化を合理的に説明できる場合、モデル①が成り立つ。モデル②の場合には女真語から満洲語への変化を合理的に説明できない部分がある。その部分は分岐してから独自に発達したとする。もっとも実際の言語には周辺言語との接触の影響があり複雑な様相を呈するという。

#### 5. 女真語と満洲語の差異の等級

満洲語と女真語は「類似している」とか「きわめて近い」と表現されるが、何に比べてどの程度類似しているのかが問題となる。デルフェル(1978)<sup>9</sup>は、ツングース諸語の諸特徴について各2言語を比べ、一致しない和により言語間の差異として1から21までの等級を設定し、ツングース諸語を大きく3語派に分類した<sup>10</sup>。北方派、中央派、南方派(女真語、満洲語)の3語派である。中央派のナーナイ語と南方派の女真語の間は16であり中位の語派的差異。女真語と満洲語の間は4でありわずかな方言的差異とした。わずかな方言的差異が同じ方言の連続であるのか或いは互いに言語的継続をなさない2個の方言であるのかということについては検討を要する。また、女真語といっても、金代の女真語と明代の女真語があり、両者には差異が認められる。この両者についても、同じ方言の連続であるのか或いは互いに言語的継続をなさない2個の方言なのか問題となる。いずれにしても女真文字で書かれた女真語の解読にあつては満洲語とくに満洲語文語と比較しながら進めることになる<sup>11</sup>。

#### 6. 明代女真語資料「じょしんかんやくご女真館訳語」

(6)、1983年。

<sup>9</sup> Doerfer, G. Classification Problems of Tungus, *Beiträge zur Nordasiatischen Kulturgeschichte, Tungusica*, Band I, Wiesbaden: Otto Harrassowitz, 1978.

<sup>10</sup> 1はわずかな下位方言的差異、4はわずかな方言的差異、5は中位の方言的差異、6は強い方言的差異、7・8は小さい言語的差異、9・10は中位の言語的差異、11・12は強い言語的差異、13・14・15はわずかな語派的差異、16・17・18・19・20は中位の語派的差異、21以上は強い語派的差異とする。

<sup>11</sup> 津曲敏郎『満洲語入門20講』大学書林、2002年。福田昆之『満洲語文語辞典』FLL、1987年参照。

女真文字・女真語の資料には金代のものと明代のものがある。金代の資料には未解読文字の解読に有用な対音・対訳資料（2言語対応資料）が乏しい。それに対して明代には女真文字の発音を注記した「女真館訳語」や、漢語訳およびモンゴル語訳が付いた女真語碑文「永寧寺碑」がある。未解読文字の解読にとって理想的な環境が整っている。ここから着手し、その結果を金代の資料に適用し修正するという進め方が効率的であり、事実そのように解読は進められた<sup>12</sup>。さて、明の成祖の永樂五年（1407）に諸民族語の通訳官の養成と外交文書の翻訳のため四夷館が設立された。そこで作られた女真文字・女真語の語彙集「雑字」（図3）と例文集「来文」（図4）があり両者を合わせて「女真館訳語」と称する。

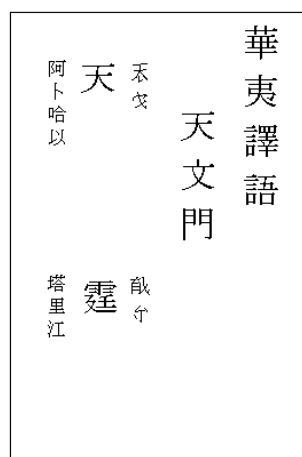


図3「雑字」初頭の翻字

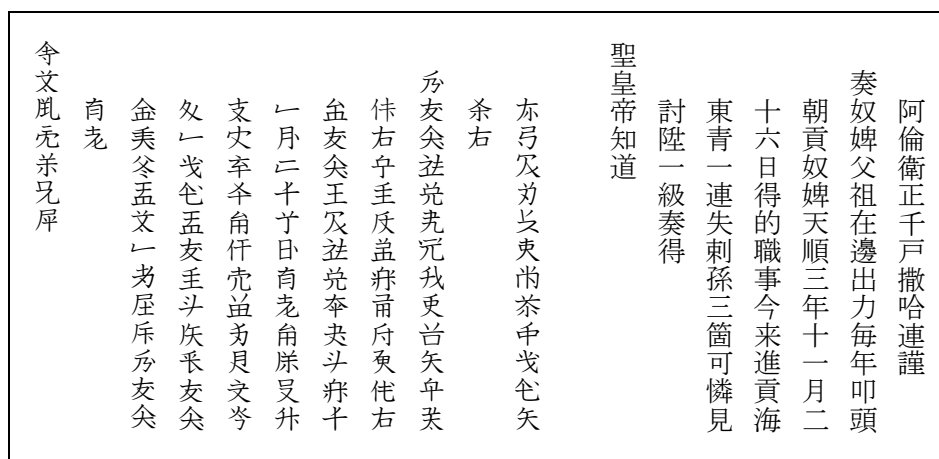


図4「来文」第1通の翻字

「雑字」全体の構成は、天文門、地理門、時令門、花木門など内容別になっている。1行目に女真文字で書かれた女真語の単語や連語があり、2行目に女真語の意味を表した大書した漢語がある。3行目に女真文字・女真語の発音を漢字で音写した注記がある。これでワン

<sup>12</sup> Grube, W. *Die Sprache und Schrift der Jurčen*. Leipzig, 1896. グルーベ氏は「女真館訳語」の研究によって女真語研究の基礎を築いた。